

テーラーカラーの構成 第2報

—— 家庭用ミシンによる裏衿の成形 ——

加藤 祥子

Shoko KATO

(家政学教室)

1. 緒 言

テーラーカラーは衣服形態の多様化した今日でも不滅の人気の有り、学生にとっても一度は縫製を経験したい一点である。

第1報¹⁾において、テーラーカラーの上衿の縫製に効果をあげる「芯の留め方」を検討した結果、従来裏衿全体に行ってきたハ刺しより、衿腰部をミシンによって直線縫いし、折山線と衿羽根部をハ刺しすることで縫製効率も上がり、出来上がりの効果も期待できることが分かった。

しかし、ハ刺しは糸の引き加減が難しく、熟練と時間を要する。家庭用ミシンを用いて裏衿の成形は可能だろうか。ミシン縫いにした場合、縫目の種類及び組み合わせ、位置と間隔、折山線付近の縫い方、衿腰部の強度と弾力等問題は多い。連続した実験を行い順次検討する。

2. 実験方法

実験は4種類、裏衿の成形に必要な種々の項目を取り上げ、テーラーカラーの裏衿を作成、出来上りの外観を観察する実験では更に実験服に縫製して比較検討した。実験服は、

表1 文化式婦人服参考寸法

Mサイズ (mm)	
計測項目	寸法
胸囲	820
胴囲	620
腰囲	880
背丈	370
背肩幅	390
背幅	350
胸幅	340

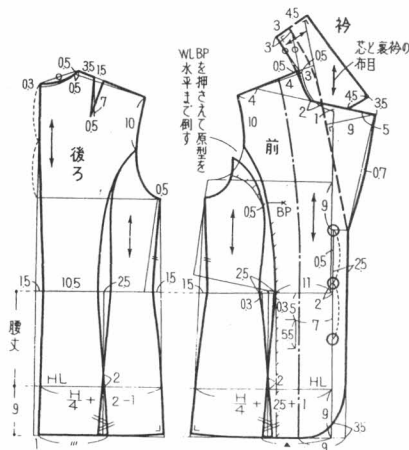


図1 文化式テーラーカラーの製図

表1に示す文化式婦人参考寸法Mサイズ²⁾を用いた文化式原型をもとに製図した文化式テーラーカラー³⁾の実験服である。図1は参照した文化式テーラーカラーの製図であり、図2は実験服の型紙と採用した縫代である。

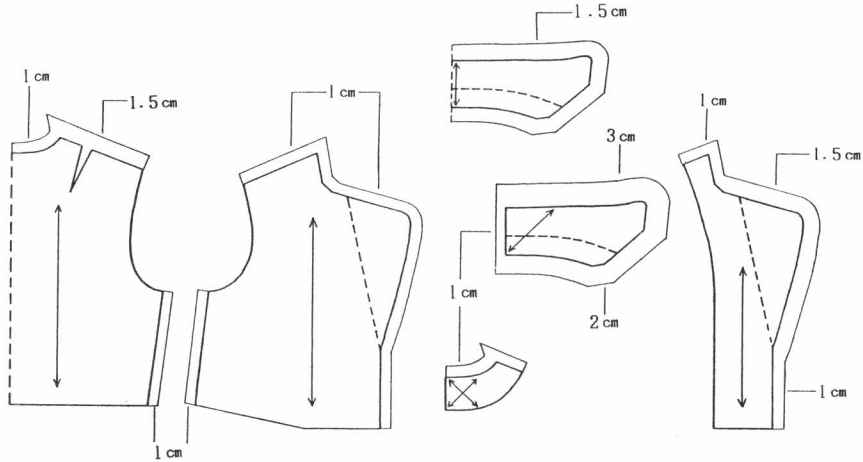


図2 実験服の型紙と縫代

実験服の形式は袖なし、一重仕立てで図1のように衿腰幅3cm、衿羽根幅4.5cm、あきの深さは胸囲線より9cm、持ち出し分を2.5cmとした。

実験服の素材は40番手、生成りのシーチングである。

芯地の諸元は表2に示す。芯地については裏衿に一般芯地のパンピース「カネカロンKPA6300」を、ラベル部には接着芯地「アピコAM200」を使用した。

表2 芯地の諸元

種類	一般芯	接着芯
品名	カネカロンKPA6300	アピコAM200
組成	経緯	ポリエステル100% アクリル100%
組織	平織	平織
厚さ (mm)	0.21	0.19
平面重 (g/cm ²)	0.008	0.006
糸密度	経緯	経緯
(本/cm)	24.4 17.6	11.0 20.0

実験服を表3の人台に着装し、前面より「衿羽根先の反り返り」、「ラベル先の浮き」を測定、後面では表4の分類で「衿腰のしわ」の数を、更に「折山のこぶ」の数も測定して総合的に外観を判定した。

表3 人台の計測値 (mm)

計測項目	寸法
胸囲	800
胴囲	580
腰囲	875
背丈	375
背幅	320
胸幅	350

表4 衿腰のしわ (cm)

分類	大きさ
特大	3.1以上
大	2.1~3.1
中	1.1~2.0
小	1.0以下

1) 実験1 芯留めの縫い方の違いが及ぼす外観への影響

実験は手縫いと2種のミシン縫いで行った芯の留め方が外観に及ぼす影響を見るため、実験服を3着作成した。

裏衿に芯を留める間隔は一定にし、図3のように衿羽根部で10mm、衿腰部で5mmとした。

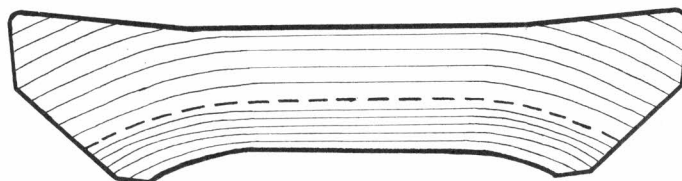


図3 芯留めの位置

実験服1の裏衿は、従来の手縫いによるハ刺しで芯を留めた。ハ刺しの間隔は衿羽根部で10mm、折山線上と衿腰部は5mm間隔である。

実験服2の裏衿は、針目2mmのミシンによる直線縫いで芯を留めた。

実験服3の裏衿は、送り2mm、振幅5mmのミシンによるジグザグ縫いである。

2) 結果1

結果は表5のようになった。実験服3は衿腰のしわの数、折山のこぶの数共に少なく、裏衿の芯の留付けにはミシンによるジグザグ縫いが良いことがわかった。

なお裏衿に芯を留付けた時点では、直線縫いで留めたものは丸みがなく平面的であったのに対し、ジグザグ縫いはハ刺しと同様に自然な丸みが得られ、立体的に仕上がった。従ってジグザグ縫いは従来のハ刺しに劣らぬ効果があることが分かった。

表5 実験1 芯留めの縫い方の違いが及ぼす外観への影響

測定項目 単位	衿羽根先の反り返り		ラペル先の浮き		衿腰のしわ				折山のこぶ
	mm		mm		個				個
実験服	左	右	左	右	特大	大	中	小	
1							2	3	4
2						2	2		3
3							1	1	1

3) 実験2 丸みのある裏衿になるジグザグ縫いの間隔

実験1の結果より、ジグザグ縫いが従来のハ刺しに劣らぬ効果を持つことが分かった。更にジグザグ縫いの間隔が裏衿の立体形状に及ぼす影響を調べるため、適度な丸みを持たせるジグザグ縫いの間隔を追究した。

実験は4枚の裏衿で行った。裏衿の芯は、送り2mm、振幅5mmのジグザグ縫いで、衿羽根部をそれぞれ15mm、10mm、7.5mm、5mm間隔で、衿腰部は4枚共に5mm間隔で留付けて裏衿全体の立体形状を観察し、丸みを判定した。

4) 結果2

衿羽根部のジグザグ縫いの間隔が裏衿の立体形状にどのように影響するか4枚の裏衿で比較した結果、15mm間隔の裏衿にはほとんど丸みが見られず、ジグザグ縫いの効果はなかった。10mmと7.5mm間隔のものにはハ刺しと同様な丸みが得られた。良好な丸みは7.5mm間隔

の裏衿であった。また5mm間隔では隙間が無くなり堅くなった。よって、衿羽根部には7.5mm間隔のジグザグ縫いが適当であることが分かった。

5) 実験3 折山線付近のジグザグ縫いの位置

上衿は折山線付近で折れる。従って、折山線とその周辺の状態が出来上がり上衿の外観に与える影響は大きい。

実験は3着の実験服で行った。図4に示すように実験服1の裏衿を折れ山線上に、実験服2の裏衿を折山線に隣接、実験服3の裏衿を折山線より5mm離してジグザグ縫いを施し、3着を比較した。

実験服は実験2の結果を得て、裏衿の芯を送り2mm、振幅5mmのジグザグ縫いで、衿腰部分は5mm間隔、衿羽根部は7.5mm間隔に留め付け、折山線付近でのジグザグ縫いの位置を変えて作成した。

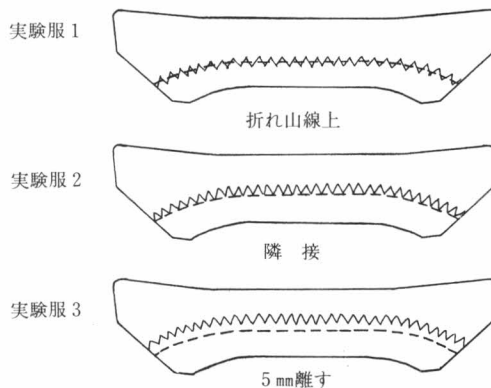


図4 折れ線付近のジグザグ縫いの位置

6) 結果3

結果は表6のようになった。

表6 実験1 折山線付近のジグザグ縫いの位置が及ぼす外観への影響

測定項目	衿羽根先の反り返り		ラベル先の浮き		衿腰のしわ				折山のこぶ
	mm		mm		個				個
単位	左	右	左	右	特大	大	中	小	
実験服									
1									2
2							1		1
3									2

観察の結果、物理量に大差はなかったが、折れ返った状態が丸く自然だったのは、折山線上にジグザグ縫いを施したものであった。ジグザグ縫いには、適度な弾力と強度を持たせ上衿を丸く折れ返らせる効果があると思われる。

折山線付近での弾力と強度の効果を上げるために折山線上のジグザグ縫いの面側に隣接するようにジグザグ縫いを施したところ更に良い結果を得た。

7) 実験4 衿腰部分の縫い方と立ち上がりの強度・弾力

上衿が立体的な構造を保ち、着用中の着崩れを防ぐには、衿腰に立ち上がる強度と十分な弾力が必要である。衿腰に適度な強度と弾力を与える縫い方を検討した。

実験は3枚の裏衿で行った。裏衿の芯は、実験2の結果を得て送り2mm振幅5mmのジグザグ縫いで衿羽根部分を7.5mm間隔に縫い留め、実験3の結果を得て折山線上と隣接する上下に同ジグザグ縫いを施した。衿腰部分は図5に示すように、送り2mm振幅5mm間隔のジグザグ縫い、針目2mmで5mm間隔の直線縫い、同3mm間隔の直線縫いとした3枚である。裏衿に芯を留め付けた状態で衿腰の強度と弾力を比較した。

8) 結果 4

衿腰部分に施したジグザグ縫いと間隔の違う2種の直線縫いを施した3枚の裏衿を比較した結果、3mm間隔の直線縫いが最も固くなり弾力もあった。ジグザグ縫いより簡単に強度を増すためには3mm間隔の直線縫いが適当である。これは第1報で論じた衿腰部の芯の留め方と合致した。

9) まとめ

実験1～実験4の結果より裏衿の芯の留付けに、従来の裏衿全体に行ってきた手縫いによるハ刺しに変わる簡便な方法として、図6に示すミシン縫いが有効である事が分かった。折山線上にジグザグ縫い、折山線上のジグザグ縫いの上下に隣接するジグザグ縫い、衿羽根部は7.5mm間隔のジグザグ縫い、衿腰部分に3mm間隔の直線縫いを施したものである。これは、手縫いによるハ刺しという熟練した高度な技術を用いずに、家庭用ミシンによって比較的簡単に短時間にテーラーカラーの裏衿の成形を行う効果的な方法である。

図7は上述の成形法によって出来上がった裏衿である。

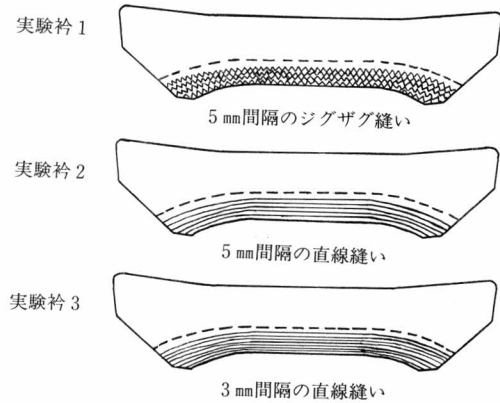


図5 衿腰部分の縫い方

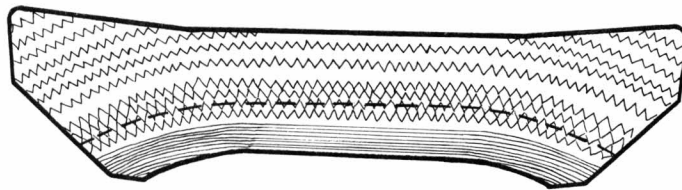


図6 裏衿の芯の留め方

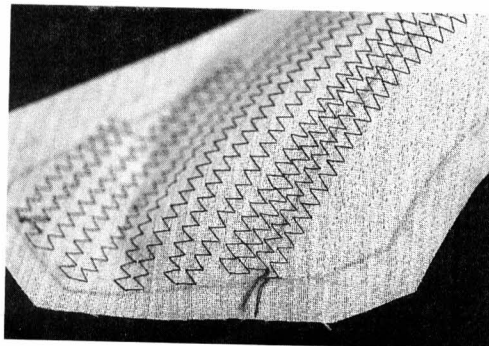


図7 完成した裏衿の成形

3. 要 約

裏衿に施すハ刺しは、裏衿の成形の為に、裏衿全体に行ってきた時間と熟練を伴う技術である。手縫いによるハ刺しに代わり、家庭用ミシンを用いて短時間で効果的な裏衿の成形を試みた結果、衿腰に強度、弾力があり、自然な丸みに折れ返る裏衿が完成した。折山線の上に送り2mm振幅5mmでジグザグ縫い、そのジグザグ縫いの上下に隣接する2本のジグザグ縫い、衿羽根部分に7.5mm間隔のジグザグ縫い、衿腰部分に3mm間隔の直線縫いを施したものである。

裏衿を上衿として完成させる為には、表衿との関係及び衿付けの母体である身頃との関係も続けて検討していかなければならない。

本研究に御協力くださいました皆様に深謝致します。

引 用 文 献

- 1) 加藤祥子, テーラーカラーの構成 第1報, 愛知教育大学家政学教室研究紀要, 25, 1994年, 77~84
- 2) 文化服装学院・文化女子大学編, 文化服装講座1 婦人服編 (I), 文化出版局, 1981年, 54
- 3) 文化服装学院・文化女子大学編, 文化服装講座2 婦人服編 (II), 文化出版局, 1981年, 28
(平成6年9月12日 受理)